

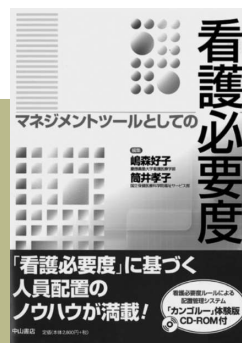
日々の看護配置のもやもやをすっきりさせる 看護必要度の実用的解説書

[評者] 山西文子 独立行政法人東京医療センター副院長

マネジメントツールとしての看護必要度

嶋森好子, 筒井孝子 編集

B5 変形判, 160 ページ
定価(本体 2800 円 + 税 5 %)
中山書店 TEL. 03-3813-1100



■看護管理者にとって待望の書

本書は看護管理者にとって待望の書である。第1章「看護必要度が求められる背景」、第2章「看護必要度データの活用事例」、第3章「看護必要度を用いた看護師配置管理システム——『カンゴルー』の紹介」からなり、「看護必要度」を臨床で活用するための実用的な解説書である。また、看護管理者はもとより、働く看護師にとっても、非常に理解しやすい内容である。日々の看護配置のもやもやをすっきりさせるために、ぜひ手にとって活用してもらいたい。

客観的な指標がなく、問題意識を常を感じながらも、看護管理者の多くが看護師の配置に取り組んでいる。従来から臨床においては、病床数や看護師数のみによる看護管理システムでの看護配置が長期間行なわれてきたために、職場ごとに看護師は不公平感、疲弊感を感じていた。それを知りつつ、真の意味で実態と異なる勤務体制、看護師配置の実情など、主観にもとづいた管理が多く行なわれ、看護師数で看護の質を上げることの検証は行なわれないままにきている。長い間、共通の尺度ももたず、改善もされず継続されてきたのは、たぶん、看護の質による診療報酬上の評価がなく、コストにも影響しなかったためと思われる。

筆者は、前任施設で看護必要度による看護管理システムを導入した経験がある。

看護管理者になったときから、患者に適切なケアを必要時にいかに効率的に提供できるかを、来る日も来る日も考えていた。近年の病院においてはよほどの専門病院でない限り、患者数の増減に施設管理者は一喜一憂しているはずである。した

がって、効率性から、より効果的な人員配置の方法はどうあるべきかを考え工夫する必要がある。つまり看護要員の定数の決め方は、極言すれば一定の理論がわが国にはなかったのである。そのようななかで、管理者はあれこれ工夫をしながら成功体験を真似てきたと思われる。

■看護必要度の有用性を検証し活用方法を提案

看護業務量測定尺度や看護度で比較していたり、虎の門病院の開発した TNS、東海大学病院、鹿児島大学病院の方法など、考え方の尺度はいくつか開発されていた。しかし、残念ながら何年経ってもいまだに全国の多くの病院で使用する尺度としては普及していない。

現実の病院では患者の状態はさまざまであり、その状態を測る共通のものさしがないければ、正確な比較は行なえない。このものさしこそが看護必要度である。看護必要度は IT を活用し、訓練によって誰でもが同様に測定できるので、非常に客観的である。また、これは看護職員だけに限らず、病院関係者すべてが認識したうえで行なわれるというメリットもある。

著者らは、看護必要度の開発者とともに、国立大学病院と民間病院の実際の患者のデータを活用・分析し、その有用性を検証している。また客観的な病床管理や退院調整、看護の質向上のための活用の提案もしている。看護管理者にとってすぐに活用できる有用な本として、自信をもって推薦したい。